

## 『もえちゃんのお願い』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



同世代の知り合いが交通事故で急死した。

事故死した大畠さんは、超がつく世話好きで、なかなかお目にかかるないほどの人なつっこい性格。年齢は50代半ばにもなるいわゆる分別ざかりの年頃なのだけれど、「あんたは小学生か!」って突っ込みを入れたくなるくらい、人が集まる場所にいつも出没しては子どもたち以上にはしゃいでいる方だった。世代の垣根がなく、いささかの無理もなく子どもたちと対等に遊んだりふざけたりできるマコトに稀有な人だった。「大畠父さん」として、老若男女を問わず誰からも親しまれていた。とてもあったかい人だった。

我が家の中男と次男が、大畠家の長女と四男とそれぞれ同級生だったので、PTAとしてのお付き合いもあった。世話好きの大畠父さんは、うちの子どもたちもしばしばスキーに誘って一緒に連れて行ってくれたりもしていた。我が家の中の子どもたちも含め、地域の子どもたちの多くが、「ただいまー!」と言いながら大畠家に遊びに(帰って?)行っていた。大畠家は我が家のように(時には我が家以上に?)居心地のいい居場所だったのだろう。翌日が休みの日などは、遊びに行った延長で、「今日はみんなで大畠家に泊まることになったから」と電話がかかってきて、急きよ同級生たちのお泊り会になることもあった。いずれにせよ、大畠家は地域の子供たちにとって安心して何時間でもすごせる第二の我が家だった。

大畠父さんは、何年か前からバイクに乗り始め、バイクにはまって行った。休日には欠かさず、仲間と一緒にいそいそとツーリングに出かけた。初夏の風が心地良い季節。その日の朝も、子どものような満面の笑みを浮かべて「行ってきまーす!」と奥さんに元気いっぱいの声を張り上げ、普段と変わらない様子でバイクにまたがって颯爽と出かけて行った。遊び疲れて満足した腕白坊主よろしく、夕方には日焼けした顔をほころばせて家に帰ってくるはずだった。

その日の午後だった。駐車場に入ろうとして一本道を右折してきた配達会社のトラックが、乗用車の後ろを直進する大畠父さんを乗せたバイクの横っ腹にぶつかった。バイクは吹っ飛ばされた。トラックの運転手には乗用車の陰になったバイクが見えにくかったのかもしれないが、そ

れでも前方不注意のそしりは免れようもない。大手の配達業者が運転するトラックなので、おそらくはトラックに搭載されていたであろうビデオレコーダーでも確認されたことと思うが、大畠父さんには何の落ち度もなかった。

お通夜には大勢の人たちが詰めかけた。やや収束してきたとはいえ、未だコロナで自粛が続いているような世の中の状況ではあったが、ワンフロアでは入りきれない大勢の人たちが、階下のフロアの会場でモニター参加しなければならないほどの盛況だった。人が集まって一緒にワイワイするのが大好きだった大畠父さんにはふさわしい会だったかもしれない。もっとも、無いに越したことない集まりではあったけれど。バイク仲間でありPTA仲間でもあった住職は、今だに信じられない、と絶句して涙ながらに法話の務めを果たした。

葬儀が終わって間もなく、当事者の運転手が会社の上司たちに連れられて大畠家に謝罪に訪れた。大事な夫を突然に奪われた奥さんは、玄関先で追い返したい思いも正直あったけれど、ぐっとこらえて家に上がつもらった。仏壇の前で手を合わせ、焼香をあげ、「すみませんでした!」と謝る加害者たちを前にして何と言っていいかわからないでいた奥さんは、子どもたちの方に顔を向け、尋ねた。「みんな、何か言いたいことはある?」思いがけず、長女のもえちゃんが口を開いた。「お子さんはいらっしゃいますか?」少し震える声で、もえちゃんは件の運転手に尋ねた。「はい、8歳になる子どもがいます」と、顔を上げられない運転手。もえちゃんは、静かに、しかし決然として言った。「絶対に仕事を辞めないでください。必ず、家族を守ってあげてください。お願いします。」上司たちに向かってさらに続けた。「この人を絶対に辞めさせないでください。仕事を続けさせてあげてください。お願いします。」保母さんとして働き始めたばかりの二十歳になって間もない我が子のその言葉を聴いているうちに、大畠母さんの目にはいつしか温かい涙があふれていた。

大畠父さん、あなたが居なくなり本当に淋しい限りです。でも、あなたが蒔いて育てた種は、しっかりと次の世代によきものをつなげてくれていますよ。